

あるむぜお

府中市郷土の森博物館だより
al museo
2021年9月20日
No.137



郷土の森予定地に復元された旧府中町役場庁舎。左には同時期に復元された旧河内家住宅と復元工事中の旧島田家住宅が見える。

復元建物、郷土の森に建つ

府中市郷土の森博物館には、現在 8 棟の建物が移築・復元されています。小学校や役場・民家・商家等、江戸時代から昭和にかけてつくられた特徴的なものばかりです。ここでは、各建物について移築・復元された頃の写真でふりかえりつつ、それぞれの特色を 8 回シリーズで紹介します。

もくじ

- 1-2 復元建物、郷土の森に建つ
その2…旧府中町役場庁舎
- 3 最近の発掘調査
国府以前飛鳥時代の役所か？
- 4-5 NOTE
府中町役場庁舎の洋風瓦
- 6 府中の史料に見る江戸時代の流行病
⑥江戸や府中のコロリ情報
- 7 園内植物探訪
①地獄花は秋の七草？
- 8 太陽系惑星ツアー
②金星の探査機は巨大な鉄球？

その2…旧府中町役場庁舎

郷土の森（府中市郷土の森博物館の旧施設名）がオープンする前年の 1986 年（昭和 61）12 月、復元工事がほぼ完了した旧府中町役場庁舎です。敷地内の造成工事が進行中で、建物に面した道は未完成の状態でした。

復元建物、郷土の森に建つ

その2… 旧府中町役場庁舎

現在、博物館本館を背にしてほぼ正面に見えるのが、この建物です。1921年（大正10）12月、現在の宮西町に建てられました。木造洋風の2階建て建築ですが、正面車寄せの屋根を和風とし、裏側には和風平屋の建物を付設させている点に大きな特色があります。

1954年（昭和29）4月の府中町・西府村・多磨村の合併による府中市誕生後には、初代府中市役所としても使用されました。1960年、鉄筋コンクリートの新市庁舎ができたことにより、その翌年から市立図書館として利用されました。さらに1966年に新たな市立図書館が大國魂神社境内に開館（現在のふるさと府中歴史館・宮町図書館）した後は、教育研究所などになりました。それも1982年に新築された教育センターに移転となり、府中市によるこの建物の活用はいったん終了しました。

同時期、この旧町役場の建物は、かつての代表的な公共建築物として注目されることになりました。「旧府中町民になじみ深い上に、府中市発展の経緯を知る記念建築物である。東京都内からこのような建築をほとんど失った今、保存は非常に望ましい」。1982年に作成された『府中市「郷土の森」復原建築物の基本計画』にある言葉です。そしてその計画の通り移築し保存すべき建物候補となりました。保存が決定し、1984年6月にその方針が発表されると、多くの新聞が「旧町役場を永久保存」などと報道しました。そして同じ頃より復元のための実測調査が行われました。

この調査は時間をかけて行われました。というのも、平面図こそありましたがあくまで設計図面自体は発見されず、しかも多くの増改築が行われて建物自体が変化していたからです。

右上の写真は、解体前の旧町役場です。塗装の劣化はもちろんですが、向かって左側に平屋の増築部分が見えます。こうした新築当時には存在しなかった部分を仕分けし、新たな図面を作成しな



教育研究所として使用されていた頃の旧府中町役場。向かって左側が増築された部分。右側にはヒマラヤ杉が植えられている。

ければならなかつたため、慎重な調査が必要だったのです。

建物の解体は同年8月に完了しました。そして、増築された部分は省き、経年劣化や雨漏りなどによってふさがれた窓や、はがれた塗装などを復旧するといった復元工事が行われ、郷土の森オープン前年の1986年12月に完了しました。さらに、多摩地域に現存する貴重な役場建築ということで、大正時代の建物としては東京都の文化財指定の第1号となりました。

ところで移築前、建物の入口は南に面していましたが、復元後は反転し北に面しています。そうした変更はありましたが、傍らには移築前と同様、ヒマラヤ杉が植えられました。現在では建物の東西両端に屋根より高く伸びています。詳細は不明ですが、建築物と植栽の相乗効果によって、移築前の姿を覚えている人に、かつての様子を思い起させてもらうという意図が隠されているかもしれません。

（佐藤智敬）

展示会案内

企画展

町役場の新築と大正時代の府中

会期：10/23（土）～3/13（日）

会場：旧府中町役場

府中町役場の歴史と、庁舎が新築された大正時代の府中の様子を紹介します。

國府以前 飛鳥時代の役所が？

八幡町二丁目 府中市ふるさと文化財課

湯瀬
禎彦



1991年の635次調査

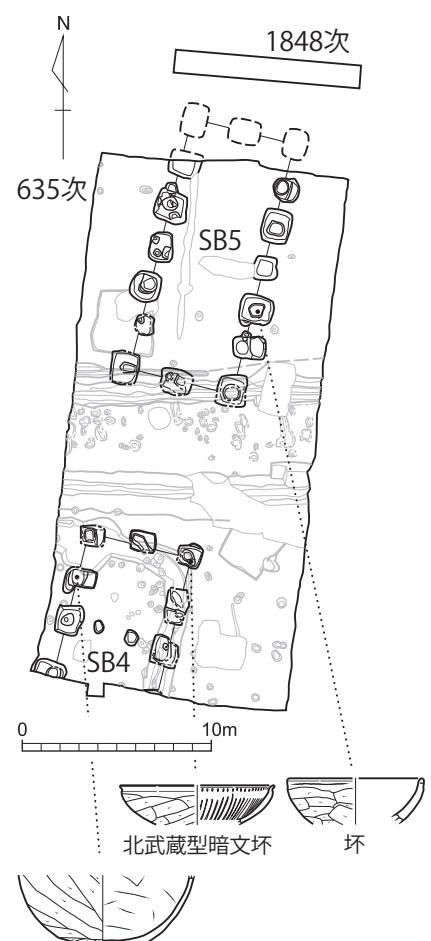
1991年（平成3）に八幡町2丁目で行われた635次調査では、古代武藏国府のなかでも極めて大型の掘立柱建物跡2棟が発見されています（本誌No.18）。この建物跡2棟は従来、全体規模、時期、性格が不明でしたが、近年これらの不明点に関わる新たな情報が相次いで確認されました。

まず、この建物跡2棟（SB4・5）を改めてみると、ともに主軸方位が真北より東に傾く建物です。また、SB4とSB5の棟筋が揃っていることから、両者は併存した可能性が考えられます。さらに、双方の規模は、SB4が桁行4間以上、梁行2間、SB5が桁行6間以上、梁行2間で、それぞれの柱穴の掘り方は約1.5m四方を測ります。こうした様相から、SB4・5は国府の役所を構成する施設の一つと考えられていました。

つぎに昨年行われた1848次調査による新たな情報をみてみましょう。ここは、SB5の桁行が7間以上の場合に柱穴の一部が位置する場所です。しかし、この場所に柱穴は掘られていないことが判明し、SB5の桁行規模は6間であったことがほぼ確実となりました。これは、古代武藏国衙の中枢施設に次ぐクラスで、SB5が特殊な施設であったことを改めて窺わせます。

もう一つの新たな情報は、近年、SB4・5の柱穴から出土した遺物を再検証して得られたものです。SB4・5の出土遺物は土師器の破片のみで、そのなかにSB4では掘り方の埋め土に7世紀中葉の北武藏型暗文壺、柱抜き取り埋め土に8世紀前葉以前の小型丸胴甕、SB5では掘り方埋め土に7世紀代の壺がありました。したがって、SB4・5は7世紀中葉以降に創建され、8世紀前葉以前に廃絶したと考えられます。

上記の年代からすると、SB4・5は国府成立に先行することになります。7世紀後半は畿内の中央政府が評制による地域支配を各地に展開させたとみられる時期にあたり、評制下の役所の可能性が生じたといえます。



635次・1848次調査の概要図

府中町役場庁舎の洋風瓦

深澤 靖幸



府中町役場庁舎の
尖塔状の飾り瓦

▼ 大正期の洋風建築

府中市郷土の森博物館の広い敷地には、かつて市内にあった歴史的建造物が移築・復元されています。その一つが、旧府中町役場庁舎です。

この庁舎は 1919 年（大正 8）から 3か年計画で建設され、1921 年に竣工しています。1954 年（昭和 29）の市制施行後は府中市役所として、さらに市立図書館、教育研究所などに利用され、郷土の森博物館の開館にあわせて 1986 年に移築されました。移築にあたっては、増築部分を取り除き、1921 年の竣工時の姿に復元しています。1987 年には、都内に残る数少ない大正期の庁舎建築として、東京都有形文化財に指定されました。大正期の建造物として、東京都の指定文化財の第 1 号でもありました。

このような評価を得ている町役場の最大の特徴は、木造洋風建築だということです。旧在地（宮町 1-8、宮西町広場）の西隣には北多摩郡役所があり、これも木造洋風建築でした。残念ながら郡役所は古写真からしか往時を偲ぶことはできませ

んが、両者の外観は似ています。左右対称で柱の外側に壁をつくり、縦長で上げ下げする窓は洋風建築の基本といってよいでしょう。郡役所と町役場のある番場北裏通りとケヤキ並木の交点にあつた府中警察署も洋風建築でしたので、この界隈はハイカラな雰囲気の建物が集まっていたといえます。これら洋風建築群のなかで、町役場は屋根に半円形の天窓を付けている点で目を引きます。

▼ 町役場の瓦

さて、こうした洋風建築ではありますが、町役場の屋根には、さんわら 桟瓦をベースとした日本古来の和瓦が葺かれています。古写真を見る限り、郡役所も同じです。明治期以降、洋風建築にふさわしいフランスの瓦の模倣品が横浜などで生産されるようになりました。こうした国産洋瓦があるにもかかわらず、和瓦が用いられているのです。おそらく、まだまだ洋風建築の数が少なく、洋瓦を容易に調達できる時代ではなかったのでしょう。郡役所にも、警察署にも和瓦が葺かれています。

しかし、そうしたなかでも、町役場と警察署の瓦にはふつうの和瓦にはない特徴があります。大木棟の左右にのる尖塔状の飾り瓦がそれです。日本の伝統建築にはない特徴的な形が西洋の意匠であることはいうまでもありません。洋風建築らしさを醸し出す重要なアイテムであったといえます。

▼ 残された瓦を見る

じつは、現在、町役場の建物の屋根の上にのっている瓦は、郷土の森博物館に移築・復元された時に、老朽化していたため、すべて新品に替えられています。

屋根から降ろされた瓦は文字通り瓦礫ですから、廃棄されて当たり前なのですが、わずかに残されたものを博物館で収蔵しています。鬼瓦4点、熨斗瓦1点、袖瓦1点、雁振瓦2点、とんび1点そして尖塔状の瓦2点です。これらの瓦は、焼成の状態や技法の違いから、制作年代の異なるものが混在していると判断できます。町役場庁舎は1940年度の増築など、数度の補修が行われていますので、異なる年代の瓦が存在する点に問題はありません。

ただ、尖塔状の飾り瓦2点は、創建時のものと判断してよいと思います。ともに先端をわずかに欠損しているものの、総高は75.5cmほどと復元できます。表面はよく磨かれています、とても丁寧につくられています。特殊な形状からすると特注品と考えてよいでしょう。ただ、この飾り瓦と粘土や焼成具合が類似した鬼瓦もありますので、鬼瓦と同じ窯元で製作されたものと考えられます。つまり尖塔状の飾り瓦は、町役場庁舎の建設の際に、和瓦の窯元でつくられたものなのです。

▼ どこでつくられたのか？

とはいっても、窯元を記したスタンプやヘラ書きはなく、瓦がどこでつくられたのかはわかりません。府中でこの町役場が建設されたころ、多摩川流域では数か所で瓦製造が行われていました。日野市、世田谷区、川崎市などで操業していたことが確認されています。また埼玉県入間市の小谷田でも盛んに生産されていて、こちらはブランド化していました。大都市東京の発展が瓦の需要を促し、近郊の瓦生産を活発化させていたのです。ちなみに、郷土の森博物館では、町役場の隣に建つ旧島田家



府中警察署（『あの日の府中』より）

の店蔵の屋根に、小谷田製の瓦が葺かれていました。

瓦は重量物ですから、近距離から供給した方がコストを低く抑えることができます。町役場の建設には資金面も含めて大きな困難があったことが確認できますので、安価な方が選ばれるのが順当です。しかし、管見の限り、これらの窯元では洋瓦は生産されていません。

洋瓦の生産をいち早く手掛けたのは、愛知県の東部、旧三河の窯元だといいます。三河は江戸時代以来の瓦の一大生産地で、海運を使って東日本を中心に販路を広げていました。いわゆる三州瓦です。そしてこの三河では、大正期にフランス人技師を招き、洋瓦の製造を行っていたことが知られています。

尖塔状の飾り瓦は、こうした異文化との接触があって生まれたと考えるべきでしょう。三州瓦と近場の窯元でコストにどのくらいの差があったのかは見当もつきませんが、洋風建築の雰囲気を演出する重要なアイテムとして、飾り瓦が不可欠のものとされ、はるばる三州から運ばれたと考えたいところです。

もっとも、府中には尖塔状の飾り瓦が他にも使われていることが古写真からわかります。郡役所の古写真には肝心の部分が写っていませんので、はっきりしないのですが、府中警察署の屋根には、町役場のものとは形状が異なるものの、明らかに尖塔状の飾り瓦が載っています。警察署は1920年の完成のようです。町役場の飾り瓦は、すでに建てられていた警察署も参考にして採用されたといえそうです。

府中の史料に見る 江戸時代の流行病

今回は前号に引き続き、本宿村小野宮（住吉町）の漢方医・治右衛門が安政5年（1858）に記したコロリ（コレラ）の記録から、当時の状況についてご紹介します。

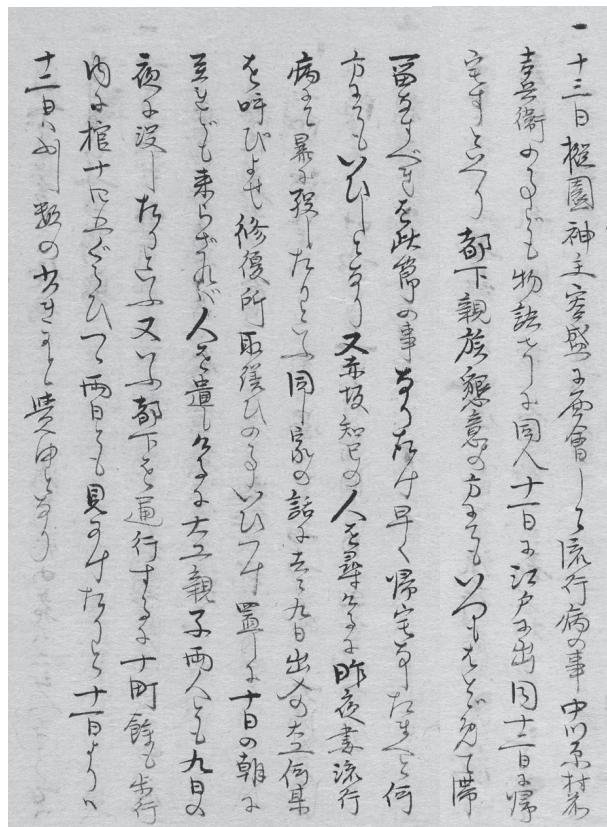
この記録の内容は、江戸や府中周辺の感染状況、コロリ除けのまじないや信仰、治療方法の検討、の3つに大別することができます。様々な人から得た情報や自身の体験を書き留め、一部に考察を加えたもので、中には噂の域を出ないものもあります。その真偽を確かめるのは難しいので、まずは記載にそって、江戸や府中周辺での感染状況をみてみましょう。

当時、江戸では多数の死者が出ていましたが、その惨状を語る際に、複数の人が棺桶の数の多さに言及しています。8月11日から12日にかけて江戸に滞在した六所宮（大國魂神社）神主の猿渡容盛は、わずか1kmの間に16、7個の棺桶を見たと言い、相模国（神奈川県）の人は旅泊先の浅草で、朝から夜7つ時（午後4時頃）の間に170個以上の通過を確認したといいます。江戸には各地から人が集まり、過密化していたので、その分感染スピードが速かったです。中には府中の人も含まれており、犠牲となった彼らを家に連れて帰るには、江戸で荼毘に付すか、何らかの手段で遺体を運搬するしかありません。

荼毘に付す場合は、火葬場が混み合っていたため、順番が回ってくるまでに数日を要しました。とはいっても、流行の最盛期の江戸に長く滞在するわけにはいきません。5日後と言われた分梅（分梅町）与左衛門の次男の荼毘は、密かに金子を渡して3日後にしてもらい、10日後とされた四ッ谷村（四谷）金兵衛の次男は火葬場に預けられ、家族はそのまま帰宅しました。

日数を要する火葬を諦めたのか、8月18日頃に死亡した人見村（若松町）清左衛門の次男は、看病に来て感染した母親の遺体とともに駕籠で村まで運ばれました。江戸を出立したのは夜中の12時頃、ひたすら夜道を進み、20日と21日の

⑥江戸や府中のコロリ情報



六所宮神主・猿渡容盛が語った江戸の状況。多くの棺桶を目にしたこと、早い帰村を促されたことが記されている。（本宿小野宮 内藤治右衛門家文書）

2日にわたり葬儀を行っています。

このような江戸での感染状況に対し、府中宿では8月10日から14日の間に3、4人死亡、その後3、4人が平癒したと記載されており、感染者数はそれほど多くありません。また、最終的な死亡者として本町（本町）・新宿（宮町）・本宿村（本宿町）の6人の名が挙げられていますが、この中には江戸在住者も含まれており、府中周辺での感染拡大はほぼなかったと言って良いでしょう。

もっともこれは結果論であって、次々と舞い込むコロリの情報は、否が応でも人びとの恐怖心を搔き立てたにちがいありません。この恐ろしい流行病が身近に迫っているという強い不安感…そこから逃れるため、多くの人がまじないや神仏への祈願のために奔走するのですが、それはまた次号でお話することにします。（花木知子）

園内植物探訪

①地獄花は秋の七草？

コロナ禍で博物館活動への影響が出て久しいですが、そんな中でも当館園内では季節の花が順に咲き、木々の緑は絶えず景観に彩を与えてくれます。今や園内花木は来館者にとって関心的となり、春夏秋冬、季節毎に楽しんでもらえる貴重な集客アイテムとなっています。本シリーズでは、そんな四季折々に見られる園内の植物から注目の一品を選んで紹介します。

一昔前まで秋の花と言えば、やはり七草が主役でした。古くから万葉集にも「萩（ハギ）が花、尾花（ススキ）、葛花（クズ）、撫子（ナデシコ）の花。女郎花（オミナエシ）また藤袴（フジバカラマ）、朝顔（キキョウ）の花。」と詠われているように、夏が過ぎて一気に観賞映えする面々が周囲を賑わしていたものです。開館当初の園内にも半数以上が自然に生えていたように思います。しかし時が経ち、秋の七草はほとんど周囲から姿を消してしまい、かろうじて月見団子に添えられるススキ程度になりました。園内では、ミヤギノハギのトンネルを設け、一種類でも目に止まるよう努力もしていますが、七草に代わる秋の花はもう無いのでしょうか…。

実は日本の秋の原風景に欠かせない花が存在します。彼岸の時期になると、田んぼの畦道や土手、墓地などに鮮やかな深紅色で不思議な形の花を咲かせる…そう、ヒガンバナです。古い時代に中国から帰化したとされる馴染み深いこの花は、曼殊沙華の名でも有名です。梵語で「赤く天界に咲く花」を意味するそうですが、確かに細長く反り返る花被片（花弁と萼が区別できないための総称）と、雄しべ雌しべが突き出る変わった形態をしています。咲いている時は葉っぱもなく、見方によっては不気味さを感じます。このた

め「死人花」「地獄花」「幽霊花」「毒花」「狐の松明」など、不吉な名称で呼ぶ地方もあるのです。墓の周りで咲いていたり、鱗茎にアルカロイド系の毒を持っていたりすることが影響しているのかも知れません。

また、渡来時期についても謎多き植物で、これもミステリアスな雰囲気を増長する一要素です。日本列島がユーラシア大陸と陸続きだった頃？ 海流に乗って有史以前に漂着した？ 奈良時代にウメやモモと一緒に？ 様々な説があるようですが、稻作の伝来とともに渡って来たとする主張もよく耳にします。ところが、これだけ目立った色・形の割には、ウメやサクラのように古事記や万葉集にほとんど登場しません。但し、「壱師の花」と詠まれた歌があり、これがヒガンバナの中国名である壱枝箭に由来するのではないかと言われているのですが、確証はありません。江戸時代に

は様々な文献に登場しているようですが、果たして実際の渡来はいつなのか？ 今日まで霧の中です。それこそ名前のごとく、幽霊のようにス~っと現れたわけでもないでしょうに。

不思議が不思議を呼ぶのか、はたまた日本人の美意識が変化したのか、近年はこの花の愛好家が増えてきました。海外に渡り、様々な色や形の園芸種として里帰りした品種も多く、秋を彩る新たな注目株として脚光を浴びているようです。各地で名所も生まれています。

当館園内でもご多分に漏れず新たな秋の風景を演出するべく、ヒガンバナエリアの拡大に着手しました。すっかり不吉なイメージは払拭され、開花が待たれる対象に変わったことで、時代の流れを実感しています。少なくなった秋の七草が揃わないのなら、新たに別の七草候補を見出したと言ったところでしょうか。古くから日本人は花の観賞に貪欲でした。季節の到来を教えてくれる花を一種でも多く欲していたところに、まさにヒガンバナがその役割を引き継いだのだと思います。彼岸に咲く花であると同時に、人々が待望した秋を飾る新規の代表種「悲願花」なのかも知れませんね。

（中村武史）





太陽系惑星ツアー



②金星の探査機は巨大な鉄球？

今回は、地球の「お隣さん」である金星についてお話をします。

金星は、地球よりも太陽の近くを回っている惑星で、地球から観察すると、常に太陽に近い方向に見えます。日没直後の「宵の明星」や、日の出直前の「明けの明星」という金星の別名にも聞き覚えがあるかもしれません。

真言宗の開祖である空海には、明けの明星が口に飛び込んできて悟りを開いた、などという伝説も残されていて、その明るい輝きは、古くから人々に知られ、親しまれてきました。

金星は地球からの距離が近いということもあり、科学者たちにとっても、強い興味の対象でした。しかし、厚い大気に覆われているため、地球からの観測では、地表の様子はほとんど伺い知ることができません。そのため、50年ほど前までは、「金星は地球とよく似た環境の星」と考える人もいて、生物や、もしかしたら金星人がいるかもしれないということが真剣に議論されていました。

第二次世界大戦後、宇宙探査の時代を迎ると、旧ソビエト連邦（以降「ソ連」）は、この金星探査に多くの力を注ぎました。冷戦下でアメリカと熾烈な宇宙開発競争を繰り広げていたソ連は、「ベネラ計画」というプロジェクトのもと、金星の詳しい様子を調べるために、次々に探査機を送り込みました。しかしながら、苦難の末に到着した探査機は、着陸前にことごとく故障し、通信は途絶えてしまいました。

実は金星は、猛烈な高温と高圧力の星。誰も測定したことがなかったため、探査機がどれくらいの強度なら耐えられるのか、わからなかつたのです。

探査機「ベネラ」は送り込まれるたびに故障し、その都度強化されていきました。装甲はど

んどん厚みを増し、ついにはいくつかの計測装置のスペースさえ譲って、高温や高圧力に耐え得る機体となりました。そして、まるで巨大な鉄球のようになった「ベネラ7号」は、1970年、ついに金星大気の試練を乗り越えて地表に到達。微弱ながらも金星からデータを送信し、「地球以外の惑星からはじめてデータ送信した探査機」となりました。

ベネラ7号からのデータを解析してわかったことは、着陸地点の気温は475℃、圧力は90気圧であり、秒速100mもの強風が吹き続けているという、金星の驚くべき姿でした。

その後もソ連は、ベネラ16号までを打ち上げ、金星の様々な研究を前進させました。残念ながら、金星人が生まれるには厳しい環境であることも、今ではわかっています。

地道な努力で少しずつ明らかとなった金星の姿。その研究は今なお続いており、日本も探査機や人工衛星を打ち上げています。

夕闇の空、あるいは明け方の空に金星を見つけたときは、近くて遠い神秘のお隣さんに思いを馳せてみてください。今年いっぱいは、宵の空で光っているはずです。（小林善紹）



ベネラ7号着陸カプセルのCGイメージ
強度重視の非常にシンプルな外観。